第一回（2015年２月13日）

創立者ランバスとスクールモットー提唱者ベーツ

田淵　結

関西学院大学教育学部宗教主事・宗教総主事

田淵です。どうぞよろしくお願いいたします。

きょうはランバス先生の思想、ベーツ先生の理念、お考えみたいなことを紹介するのではなくて、125 年の歴史を見通したときにランバス先生、ベーツ先生は私たちにとってどんなふうに意味を持っているのか、何を学ぶべきかということを、やはりキリスト教主義（教育）とは何かということも意識しながら考えてみたいと思います。

私は、宗教主事としての働きのほかに、関西学院千里国際キャンパスの統轄という仕事をしております。今から 6 年前に、関西学院は当時の千里国際学園と合併して、箕面市の小野原にキャンパスを設けました。そこにはインターナショナルスクールと日本人の学校が同居しています。後でまた出てきますが、そこでは決してキリスト教主義が根づいているわけではありません。ですからそこで働くということはすごくチャレンジングであるし、しんどい面もあるのですが、ただ、ランバス先生やベーツ先生の働きを通して見ると、ランバス先生、ベーツ先生も同じようなことを感じ、考えておられたのではないかという気もしてきます。そういうことも含めてのお話をしたいと思います。

ランバス～ベーツ　学院の土台を据えた二人

ランバス
学院創立者・初代院長

●「世界市民」 第一次大戦期に
　　オーストラリア、南極以外の大陸に足跡
　パールリバー教会 「世界市民にしてキリストの使徒」
　　アメリカ人両親のもと上海で誕生〈多文化共生のモデル〉
　世界規模での働きは関西学院離任以後のこと
●キリスト教主義　principles of Christianity の表明
　神学部と普通学部　その両者「優劣なし」

私塾的雰囲気=キリスト教的家族主義（生活空間としてのキャンパス）

ベーツ
初代高等部長・第四代院長・初代学長

1910年に関西学院着任　第二次大戦直前まで在職（強制送還）
　カナダメソジスト教会の関西学院経営参加
　・専門学校神学部
　・高等学部文科・商科＝高等学部文学部・高等商業学部　開設
　・"Mastery for Service" 提唱
　・上ケ原移転
　・関西学院大学開設

関西学院の原型の完成　関西学院エンブレム制定

皆様はランバス先生、ベーツ先生のことについてはよくご存じだと思いますけれども、私はランバス先生、ベーツ先生がお働きになった学院最初の 40 年間に、関西学院の原型はほぼ完成されて、後はすべてそのバリエーション、変奏曲みたいなことじゃなかったかと思います。

グルーベル院長を中心にして、2009 年ですけれども、関西学院はミッションステートメントを策定いたしました。それを解説した「輝く自由」というパンフレットがあります。そこには、一番最初にグルーベル先生がミッションステートメントとは何かということを書かれておられ、その後にランバス先生やベーツ先生の働きであったり、関西学院の理念等を短くまとめた冊子で、好評をいただいています。入口に置いていますので、お持ちでない方は後でぜひお持ち帰りいただければと思います。

それを要約すると、関西学院のミッションステートメントは「Mastery for Service を体現する世界市民を育む」、つまりランバス先生とベーツ先生のイメージがどんと重なって出てきています。それを 125 周年を契機として新たに展開することが必要だし、その場合には関西学院の歴史をもう一度確かめ合いましょうということがあると思うんですね。

ランバス先生については「世界市民」というフレーズが使われます。オーストラリア、南極以外の大陸に活動の足跡を残されたということですね。現在のように飛行機で飛び回れる時代ではありません。第１次世界大戦期ですから、よくぞそこまで活躍されたなという気がします。ランバス家の出身教会であるアメリカのパールリバー教会には「世界市民にしてキリストの使徒」というランバス先生を顕彰する言葉が刻まれており、そこからこの言葉がとられているわけです。ランバス先生のお生まれは上海です。ご両親はアメリカ人、その後日本で、そして世界的に活躍され、その時代から多文化共生モデルを生きてこられた方なのです。

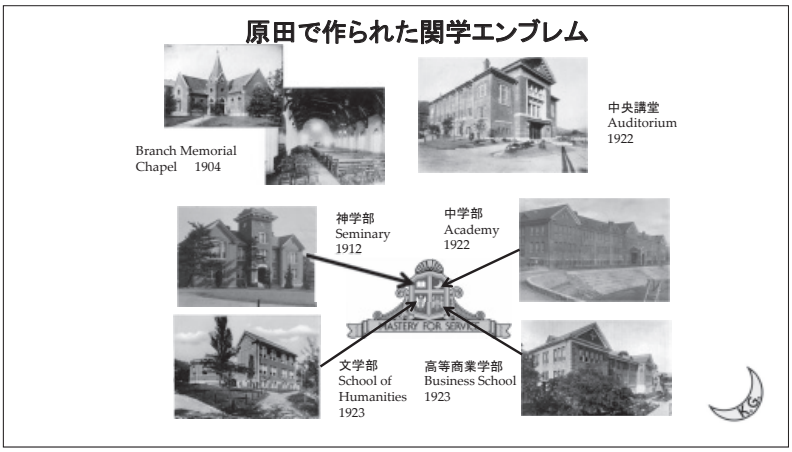
この話をしますと千里国際の生徒たちはすごく納得するものがあります。つまり、世界はいろんな国の人たちがいろんな違った言葉を抱えながら、いろんな違った考え方をたまにはぶつかり合いながら生きてるのが世界だということを現実に体験し、学んでいるのです。どうしても日本にいますと、すべてが日本語で片づいてしまいます。すべてがわかっているやろ、空気を読めという、日本の空気に親しんでいる人たちだけで動いている社会になりがちですけれども、そうじゃないよということを、ランバス先生は最初からご存じだった。この話は千里国際の子供たちはすごくよくわかる話として伝えられます。

同時に私は、ランバス先生がキリスト教主義ということを宣言されたというところをもっと評価すべきだろうと思います。学院創立直後「関西学院憲法」が定められます。この憲法の策定にランバス先生はどこまでかかわられたか、それは議論がいろいろありますが、その中で“principles of Christianity”（「基督教の主義」）という言葉がきちんと書き記されていまして、そこで神学部と普通学部の２つの学校ができるのですけど、その差には優劣がない。どうしてもキリスト教の学校ですから神学部のほうが大事だと思われるかもしれないですけど、そうじゃなくて普通学部も大事なんだということを明記しております。普通学部も神学部と同じようにキリスト教というものを大事にするという伝統が最初からあったのですね。そういう学校をつくられたということに注目すれば、2009 年の「ミッションステートメント」の一番最初も、関西学院がキリスト教主義に基づくということから始まりますから、学院憲法はきちんと継承されているのです。

現在の神戸市立王子動物園があるあの場所に、非常に家族的なキリスト教の雰囲気の溢れる私塾的な小さな学校があった。これがランバス先生のスタートになるかもしれません。

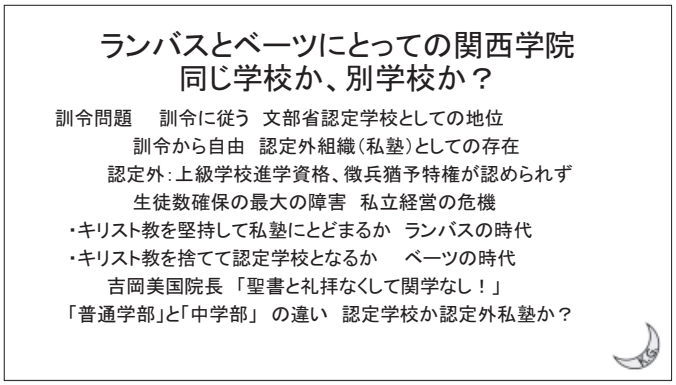
ベーツ先生は、初代高等学部長、第４代院長、初代学長を歴任されたわけですけれども、関西学院に来られたのは 1910 年。ランバス先生は非常に短い期間（来日後４年）で関西学院を去られたのに対して、ベーツ先生は第２次大戦直前、太平洋戦争で欧米の方々が強制帰国を余儀なくされるまで 35 年間にわたっておられたのです。

ベーツ先生の来学というのは、カナダメソジスト教会が関西学院の経営に参加したためです。そして関西学院は、いわゆる「きちっとした」という言い方は変ですが、「学校」としてどんどん発展していきます。これはベーツ先生の着任直前ですが、1908 年には専門学校令による神学部、そして着任後すぐの 1912 年には高等学校令に基づく高等学部（文科・商科）が開設されるのです。さらに 1929 年には創立の地神戸原田の森から西宮上ケ原に移転して、関西学院大学へと発展してゆくのです。ランバス先生が最初につくられた神学部、普通学部とベーツ先生が来られて以降の高等学部との違い、それは「私塾」と「学校」という違い、そこに大きな飛躍・展開があったのです。



先ほど申しましたように、創立以来の最初の 40 年間で学校としての関西学院の原型が完成したのですが、その 40 年目の関西学院の学校組織を象徴するのが、今も上ケ原時計台の正面に掲げられている関学エンブレムですね。そこに刻まれている４つのシンボルが、それぞれ神学部（聖書）、中学部（三日月）、高等商業学部（ヘルメスの杖）、文学部（ペンと松明）を表しているのです。これは現在私たちも使ってますから、この時に関西学院としての原型がつくられたというのはそういう意味ですね。ベーツ先生がおられる時にこれができていたということになります。月のマークは割と早くにできます。それぞれの記章にはどういう意味があるか、今回新しくなりました関西学院事典をどうぞお読みください。

文部省訓令第十二号への対応　「認定学校」か「私塾（認定外学校）」か



そこからきょうのお話は、本論に入っていくわけですけれども、関西学院の最初の 20 年、南メソジスト監督教会が学院を経営していた時代は、実は関西学院にとってはすごく大きな試練の時でした。学院創立の 1889（明治 22）年は、明治憲法が発布された年です。その翌年には教育勅語が出ます。私は現在、教育学部におりますので、学生たちに教育勅語を配って、読んだことはあるかと聞いたり、こういうのが日本の教育の原点というか基点というか、日本の教育の出発点であるのだということぐらい知っておきなさいと解説しています。その路線の延長上に出された文部省訓令第十二号（「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件」明治三十二年八月三日）があります。

それから「課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行ウコトヲ許サザルベシ」というのはまさに宗教教育禁止令です。ランバス先生はキリスト教の主義によって学校をつくろうとされた。ところがこの訓令が出たときは先生はアメリカに帰っておられたのですが、そういうビジョンを持ってつくられた学校に対して、日本の社会、政府の動きは、認定学校では宗教教育は禁止する。キリスト教学校に対しては特に大きな動揺をもたらします。現在、関西学院はキリスト教学校教育同盟に加盟しておりますけれども、その教育同盟の設立は、この訓令が出た時代にキリスト教学校はどうあるべきかという問いから始まったのです。ただ、これが出た 1899 年の時点では、関西学院はまだ私塾だったのです。つまり、文部省が認定する学校ではなかった。私塾ですから好きにやったらいいわけですし、そんな問題も気にしなくてもよかったのです。

こういうことをお話しすると、皆さんからお叱りを受けるかもしれませんが、ランバス先生がつくられた関西学院と、ベーツ先生が来られて以降の関西学院とは同じ学校なのでしょうか。つまり、そのお二人の時代は連続しているのか断絶しているのか、ということを考えさせられるのです。

文部省認定学校の地位を獲得するかどうかで、当時学院でもすごく議論になりました。訓令から自由になる、それは、私塾としてとどまるということです。文部省は認めなくてもそれは関係ない、自分たちでやればいいということですね。その生き方が 1 つです。

ただし認定を求めないということは、いくら関西学院で勉強しても上級学校に進学する資格は得られません。だから上級学校には行けないということです。また認定学校には徴兵猶予特権がありまして、文部省が認める学校でちゃんと勉強しているのだったら、徴兵は待ってあげましょうという時代があったのです。でも私塾なのですから、関西学院の学生は徴兵されれば兵隊に行かなければならない。ということになってきますと、大きな問題があります。つまり、それでは生徒が集まらなくなってくるのです。私立の学校ですから学生さんがいないと学校は成り立ちません。これは 125 年たった今でも、関西学院大学にとっても、中学部にとっても、高等部にとっても、初等部にとっても、私がお預かりしている千里国際でも同じなんです。何人生徒さんが来てくれるか、しかもどれだけいい生徒さんが来てくれるかが、いつも議論になります。

第 2 代院長となられた吉岡美國先生の有名な言葉、「聖書と礼拝なくして関西学院なし」に代表されるようにキリスト教を堅持して私塾にとどまるか、それに対してキリスト教を捨ててという言い方はおかしいかもしれませんけれども、訓令に従って認定学校になるか、創立直後に学院が直面した最初の大きな試練でした。

ランバス先生がつくられた関西学院とベーツ先生がつくられた関西学院は、同じ学校なのか別の学校なのかという先ほどの問いですが、その答えは、普通学部は中学部と名前を変え、ベーツ先生があれだけの学校を整えて行かれた、というのは、文部省認定学校としての歩みを選ばれたということなのです。そうすると最初の問いに戻るわけですね。

ランバスとベーツのキリスト教主義
連続（同じ）か不連続（別物）なのか

ランバス：神学部と普通学部　キリスト教を軸とする人格教育
ベーツ：ビジネススクール　学術性を全面におく学術的教育（大学）
◆カナダ客員教員ケニー先生の指摘（「関西学院とカナダ」）
　南メソジスト（ランバス）の敬虔主義　教会教育的学園形成
　カナダメソジスト教会の合理主主義　学校教育的学園形成
　訓令以後の文部省政策への対応

関西学院における二つの「キリスト教主義」のとらえ方の並存

20年ほど前、カナダのリジャイナ大学のスティブン・ケニー先生がカナダ研究のために関西学院大学に1年間来られました。先生はカナダの現代史の専門家で、学生たちにもご指導いただいたのですが、そのとき「関西学院とカナダ」という論文をキリスト教主義教育研究室の紀要に書かれました。そこで先生は、ランバス先生のキリスト教主義とベーツ先生のキリスト教主義の性格の違いを非常にわかりやすく書いておられます。ランバス先生が代表する南メソジスト監督教会の姿勢は、キリスト教の信仰というものを中心にして、それを学生たちに伝え、それによって学生たちの人格教育を行うための学院経営につとめたようです。ミッションスクールという言葉がありますね。よく伝道学校、布教学校などと訳されますが、キリスト教の信仰を伝え、クリスチャンを育てるための学校というイメージが定着していますが、最初の関西学院は、どちらかといえばそちらに近かったのではないでしょうか。

それに対してベーツ先生が代表するカナダメソジスト教会は、合理的、社会的な学校経営を目指した。つまり関西学院も、まずは教育機関としての学校としてのあり方を整えてゆくべきことに着手したのです。もちろんベーツ先生もメソジスト教会の宣教師のお一人で牧師さんですから、キリスト教をないがしろにされたわけではなかったのですが、ベーツ先生が関西学院に来られたのは、この訓令第十二号にどう関西学院として対応すべきかという課題に取り組むためで、ベーツ先生は訓令を受け入れて認定学校になる、ということを選ばれた。その結果として関西学院は、やがて大学をつくるところまで発展できたのです。

ランバス先生は神学部、普通学部という人格教育のところを強調する学院形成をされましたけど、ベーツ先生は社会科学的といいますか、社会の要請に応える学校としての学校形成に尽くされたのです。当時の神戸は、まさに国際貿易港として、商業都市としてめざましい発展を見せつつあったという状況の中で、ビジネスを教える学校の必然性、必要性が大きかった。そのような社会の要請に応える学校をつくるというところで、ベーツ先生は大胆な選択をされたと思われます。

実はベーツ先生はもともとは関東で働かれています。東洋英和、山梨英和、静岡英和、これはカナダメソジスト教会がつくった学校です。当然ベーツ先生も東京や甲府でも教会に関わられています。その中で訓令が出るわけです。そうすると、実は訓令が出たときにカナダメソジストの中でも結構議論が分かれて、皆さんを身内としてあえて申しますけれども、もうキリスト教をやめるとは言いませんけれど、表だってキリスト教を語らないというカナダメソジストの学校ができたんです。そのなかでカナダメソジストが関西学院の経営に関わるという方向性が打ち出されたのです。

カナダメソジスト教会の関西学院経営参加

なぜカナダメソジスト教会は青山学院に参画しなかったか？

関西学院経営参加の最初の課題

⇒　学校教育機関としての関西学院の「再建」？

会計責任者マッケンジー着任

カナダメソジスト参画以後、文部省認定学校としての目覚ましい発展

Building Committee記録に見られる（校舎群建築の費用負担問題など）

南メソジストとカナダメソジストの経営上の激しい議論

ウェンライトは関西学院に留まらなかった　銀座教文館の開設

余談ですが、そのとき、なぜカナダメソジスト教会は青山学院に経営参加しなかったのか。青山学院はアメリカ、北のメソジスト教会の設置です。それまで関東を中心に活動してきたカナダメソジスト教会としては、青山学院と協力されても不思議ではないのに、なぜ関西学院に来られたのか、ちょっと気になります。

ベーツ先生はじめカナダメソジスト教会の宣教師の方々の最初の課題は、学校教育機関としての関西学院を再建することでした。文部省訓令が出て学生がどんどん集まらなくなってきて学校経営が厳しくなった関西学院をどう立て直すかということが、与えられたミッションではなかったかという気がいたします。

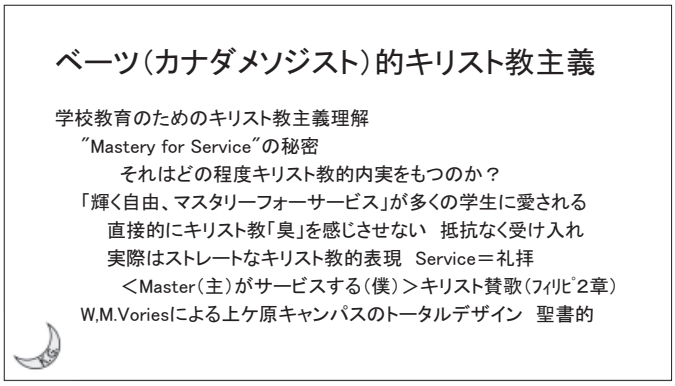
ベーツ先生だけが関西学院に来られたわけではなく、カナダメソジスト教会の宣教師の先生方がたくさんおられた中に、マッケンジーという先生がおられました。その先生は会計責任者と呼ばれています。つまり、学校の会計をきっちり見ますよと、そういう経営面でのスタッフとして着任された方、そういうことが結構認知されている方でした。

それからウェンライト先生が南メソジスト監督教会の宣教師として来られました。もともと大分におられましたが、関西学院に来られて最初はかなりの貢献をされます。ところが先生はすぐ辞めちゃうんです。東京で教文館という本屋さんを出されます。ウェンライト先生は中学部長もされましたが、関学をやめていかれた理由は何だろうということを考えた時に、ひょっとしたら、ご自分の働く場は別にあるんじゃないのかと思われたのかなと勝手に思っています。

それから先ほど神戸原田の森の写真、何枚かありましたけれど、たくさんの建物をどういうふうに建てていくかだけではなしに、そのお金をどこで工面するかみたいなことを含めてBuilding Committeeがつくられるんですね。その記録でおもしろいのが、メソジスト教会同士、つまり南メソジスト、アメリカの教会とカナダの教会とどっちがいくら出すのかというのが結構出てくるんですよ。どっちがいくら出すんやという話、結構そこはちゃんとした議論が繰り返されているところがあります。

何が言いたいか、やっぱり関西学院の経営というところを含めた学校運営を、カナダメソジスト教会は割と積極的にされた、そして学校としての整備をされていった、組織を整えられていったということがあるのじゃないかなと思います。

では、その当時、ベーツ先生がキリスト教主義をどう捉えておられたかというのが今日の大きなテーマになるのですが、私は“Mastery for Service”という言葉の中にこそ大きなヒントがあると思います。



ただしこのフレーズ、関西学院校歌『空の翼』のなかで「輝く自由、Mastery for Service」と歌われているのですが、これほど関西学院の人に愛されている言葉はないと思うのです。関西学院の人は、輝く自由と聞かされたら、Mastery for Service が響くわけです。ただ、なぜそれがそんなに受け入れられているのかというと、あまりキリスト教の臭いがしないからではないかと私は勝手に思っています。「私はキリスト教はわからへんけどマスタリーフォーサービスならわかる」とか「キリスト教は嫌いなんやけどもマスタリーフォーサービスは好き」という方はけっこうおられます。Mastery for Service は、信仰の有無に関わらずとにかく、あなたは本物のサービスができるようになるために勉強しなさい、それはキリスト教にふだんあまりお触れになったことのない人にもメッセージとして伝わっていくのです。

今年は阪神・淡路大震災後の 20 周年の年でした。震災直後の混乱していたとき、一番最初に現在のヒューマンサービスセンターの前身となる救援ボランティア委員会が立ち上がろうとしているときに、「今こそあなたのマスタリーフォーサービスを」という言葉が生まれました。ある人が宗教センターにやってきて、この言葉をポスターに書いてどこか行ってしまった。その人が一体誰だったのかはわからないのですが、それでボランティアをしようという気持ち、みんなでやらなければということになりました。語り継がれて、今では伝説になっています。

さきほど、「キリスト教は嫌いやけどマスタリーフォーサービスは好き」という人がいると言いました。でも、本当のところ、Mastery for Service ほどストレートなキリスト教的表現はないのです。新約聖書フィリピの信徒の手紙 2 章 6 節以下に、主と呼ばれるべきキリストが僕の形をとった、つまりマスターであるべきイエスがサーバントに徹したという記述がありますが、これぐらいキリスト教的な言葉、ストレートな言葉はない。だけど、そのようなキリスト教的意味までが理解されなくても、それはそれとして一般的にもそのメッセージを訴えているのです。ベーツ先生の語ろうとしたキリスト教主義は、むしろこういうところで理解されるのではないでしょうか。

ヴォーリズによる、新たなキャンパスのトータルデザイン

上ケ原キャンパス。1929 年にそれまでの原田校地（現在の王子動物園）を売却し、上ケ原に移ってきます。そのときに、すでに原田キャンパスでもたくさんの建築実績がある、ウィリアム・メレル・ヴォーリズが、新たなキャンパスのトータルデザインを行います。恐らく私は、このキャンパスが日本一美しいキャンパスだと自負しています。と思った途端に神戸女学院が同じヴォーリズキャンパスで重要文化財になりましたが。

ところでこのキャンパス、なぜ甲山をきれいにバックにして、時計台があって、中央芝生があって、その周りを校舎が取り囲んでいるのでしょうか。それは聖書の言葉を語りかけるデザインになっているからです。旧約詩篇の 121 編に「私は山に向かって目を上げる」という有名な言葉がありますが、上ケ原キャンパスはこの聖書の言葉が形としてあらわされていると私は考えています。なぜ中央芝生があるのだろう、同じく詩篇 23 編の「主は羊飼い。わたしには何も欠けるところがない。主は私を青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに・・・」という言葉が表現されている。ただし、そのような聖書の言葉を知っている人にはわかるし、まったく聖書など読んだことのない人にとっても、このキャンパスはとても居心地がいい。そういう意味では、ベーツ先生とヴォーリズ先生には、キリスト教以外のどこかで一致するところがあったのかなと思います。

実はベーツ先生とヴォーリズ先生は非常に仲がよかったようです。生涯の友人であったと。その話をし出したらまた話が横へそれてしまいますけれども、ベーツ先生が神戸原田の森で関西学院という学校を本格的につくっていこうとするとき、ヴォーリズ先生も心機一転、日本での彼なりの本格的な伝道活動を建築事業を通じて開始しようとしており、その二人の想いがひとつになって関西学院のキャンパスは生まれたのです。

実は本格的なヴォーリズ建築の中規模以上の建築の最初は関西学院の原田の森キャンパス、神学館です、ヴォーリズ先生のご存命中、最後に手掛けられた建物の一つが上ケ原のランバス記念礼拝堂です。つまりヴォーリズ先生の最初と最後の本格的な建物は関西学院だったのです。これは偶然ではないでしょう。

第二次世界大戦中、関西学院ではキリスト教を語ることは許されませんでした。ベーツ先生たちも本国へ強制帰還させられ、礼拝をすることもゆるされなかった。神学部も閉鎖された。そのとき関西学院はキリスト教について沈黙したのか、キリスト教の火は消えたのかといったら、この上ケ原キャンパスがあったのです。ルカによる福音書 19 章の言葉を借りますと、「もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す」、どのような状況にあってもこのキャンパスは聖書の言葉を訴え続ける、そうやって関西学院のキリスト教主義は戦時中も守られたのでしょう。ただし、それはわかる人にはしっかりわかる、そういう意味では関西学院のキャンパスは、とても深みのあるデザインなのです。

私は、関西学院の二つのキリスト教主義の形、ひとつは、直接にキリスト教、信仰を継承するというもので、神学部、普通学部がそのミッションに基づいて建てられ、現在もその思いは息づいている。神学部は将来のキリスト教のリーダーを養成する、キリスト教の未来を支える意味でも、信仰を抜きにしては語れない学校です。それに対して高等部、大学では教育や研究が前面に打ち出され、それをキリスト教主義が支える形、どうしてもキリスト教主義が表面に出にくいところが出てきます。先ほど小川宗教活動委員長が、昨年大学が文部科学省のスーパーグローバルユニバーシティに指定されたと言われました。ところが、大学のほうでスーパーグローバルについての綿密な計画書を作成されたのですが、そこではキリスト教主義はあまり前面に出てきません。「世界市民」「Mastery for Service」が出ています。ですから、高等教育、専門教育になると、どうしてもキリスト教主義がバックになってしまうというのは学問の性格上あるかもしれませんが、私は、ベーツ先生はむしろそちらを目指す学校として関西学院をつくられたのではないかなと思います。そして、その二つのキリスト教主義の形が、関西学院の歴史の中で展開されてきたと考えています。

戦後、宗教活動委員会の先生方がカナダにベーツ先生を訪ねられたとき、そこでベーツ先生が「クリスチャン」「クリスチャンジェントルマン」という二つの言い方を使い分けられたということを伺いました。キリスト教の信仰者、信仰者ではないがキリスト教的な素養を豊かに持って育っている人たち、その人々たちがともに関西学院を築いてきたのでしょう。

創立 125 周年のキリスト教主義を考える　　初等部と千里国際

創立 125 周年のキリスト教主義を考えるとき、関西学院初等部と千里国際キャンパス、それは好対照として紹介できるでしょう。初等部では１日に３～４回お祈りをします。始業時、チャペル、お弁当の前、終業時に教師と生徒たちが全員祈りの時をもつ。すごくキリスト教的な雰囲気があふれています。一方、千里国際では週１回 15 分だけのプログラムでやってます。讃美歌を歌ってちょっとしたメッセージを語り合って、お祈りをして、参加は自由で集まる人は非常に少ない。どちらも関西学院の学校ですが、ではどちらが関西学院のキリスト教主義を示しているのか、とても考えさせられる現実です。

昨年、関西学院は創立 125 周年をお祝いいたしました。いろんな企画をしましたし、皆様もお出でいただいたことと思います。そのときに掲出された関西学院のポスターですが、たくさんの方には「おお、関学か」と思っていただけると思います。朝昼晩の時計台です。私はこれを見て、「やっぱりそうや、でも、これでいいのかな」と思いました。なぜ、ランバス先生がここにいないのだろうかということです。時計台ができたのは上ケ原移転の年 1929 年で、85 年前です。もちろん時計台を写していいのですよ、だけど 125 周年を祝うのだったら創立当時の原田の森の写真を使うとか、つまりこれは言い過ぎかもしれませんけど「創立者のランバス先生が外されちゃったんじゃないか」という気がしたのです。

一昨年のＮＨＫ日曜日夜の大河ドラマは「八重の桜」、新島襄夫人の物語でしたね。それはともかく、1875 年創立の同志社が今年創立 140 周年を祝われる時には、創立者新島襄の写真は外せないし、その上で現在の同志社の写真を使われるかもしれない、と思います。事実、東京駅に張り出されている関学のポスターは時計台、同志社のポスターは新島です。この辺が現在において関西学院、そのキリスト教主義とはどういうものかを考えさせる大きな手がかりとなるような気がします。

アノニマスという言葉がここで思い浮かびます。直接的に表立って言わない、間接的に表現する、匿名でというかすこし謙遜というか控えめな姿勢を示すことばです。キリスト教主義を語ろうとするとき、キリスト教とか信仰は直接に前に出ない、ランバス先生も前に来ないで時計台が前に来る。Mastery for Service が訴えられるときに、直接的にキリスト教信仰そのものは控えめに語られる。それが現在の関西学院のキリスト教主義だなと思います。

私はよくこれで礼拝の話をするんですけれども、クイズです。ヴォーリズ先生の最後の建築作品、上ケ原のランバスチャペルの正面に何があるでしょうか？　きょうはちょっと暗いですから中へ入られてもはっきりしないかもしれませんので、またいつかご確認ください。どうぞ皆さんで答えを見つけてください。でもこれを言っちゃったら答えになりますが、ランバスチャペルにお入りいただくと正面にどんと大きな十字架が建てられています。ただし最初は。気がつかないんですが、でもよく見るとそこにあるんです。じゃあどういうふうに十字架が皆さんの目にとまるか、ぜひ一度見ていただきたいと思います。これはすごくおもしろいデザインなのです。私はこれ、関学だなと思うのです。それだけでも何か格好いい、でもよく見ればそこにもっと大事なものがあるのです。そこにアノニマスという感じがするのです。

125周年以後の関西学院キリスト教主義

関西学院ほどキリスト教主義教育に熱心な学校はない
ほぼ全学部に宗教主事を配置　宣教師も？？
何人「牧師・宣教師」がいるか？　　その人件費総額は？
学部別チャペル室、独自のチャペルアワー開催　週何回？
キリスト教科目の必修化　一貫教育の柱？
では2万7千人プラス教職員の何人がキリスト教プログラムに関係？
それでも関学キリスト教主義は守られる　アノニマス的な強さ
間接的であるからこそ全体に受容されるキリスト教主義の強み

といいましても、関西学院ほどキリスト教主義教育に熱心な学校はありません。一体キャンパスに何人の牧師、宣教師が働いているのでしょうか。関西学院ぐらいチャペルに熱心で、キリスト教教育に熱心で、日常的に、幼・小・中・高・大、合わせると毎週５０回以上のチャペル（礼拝）プログラムがあります。では、27,000 人プラス教職員 1,500 人ぐらいの方がおられる中で、いったい何人の方がキリスト教プログラムに実際に出席をされているだろうか、というと非常に限られた数になるのかもしれません。でも決してキリスト教主義教育を否定されるわけではないし、関学のキリスト教主義に対しての理解、あるいは Mastery for Service は好き、という形で関西学院を愛しておられるわけです。

だから、私は現在の関西学院のキリスト教主義は間接的・アノニマスであるからこそ、全体に受け入れられる形でキリスト教主義が展開されているのではないかなと思っています。ただ残念なことに、間接的過ぎると直接的なものがどうも薄れてしまうということもあります。学生たちに信仰を持って欲しいと私自身個人的には祈りますけれども、学校ですから、学生たちに直接的にそれを求めることには難しさを感じます。

それでも、私は関西学院の未来を支えるのは神学部だと思っております。なぜかといったら、キリスト教世界のリーダーをつくる学校として関西学院が建てられたわけですから、そういう方々がおられなければ関西学院を支える土台としてのキリスト教信仰も生まれてこないわけで

あります。だけどそういうふうにつくられてきたリーダーたちが、日本の社会の中でキリスト教を語り、どのように定着させていくかというときに、私はベーツ先生の生き方が大きな意味を持ってくると思います。

ベーツ先生は決してキリスト教を曖昧にはしていません。関西学院を支える大きな考え方をしっかり押さえながら、しかしそれをたくさんの人に受け入られる形で、愛される形で語り続ける、その意味でのベーツ先生の働きはすごいと思います。同じように関学のキャンパスを通してヴォーリズ先生の働きの大きさを教えられるのです。

時間が来てしまいました。今日はベーツ先生やランバス先生がどんな人だったのかという個人的なお話にはなりませんでしたけれども、関西学院のキリスト教主義はお二人によって築かれ、現在も大きな意味を持っているということを少しでも私なりの立場でお話しできたこと、それを熱心に皆様にお聞きいただけたことを心から感謝しております。

きょうはどうもありがとうございました。